
Fantasy in the Percssion!?

碧。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fantasy in the Percussion!?

【Nコード】

N7746W

【作者名】

碧。

【あらすじ】

ある中学校の吹奏楽部。その中の一つのパートの四人が主人公！吹部の練習をしていたらある日突然異世界に！？

四人は帰る事ができるのか？

音楽の知識で謎を解き、世界を救え！

キャラ紹介。(前書き)

あらすじにはああ書きましたが…
本当に音楽の謎が出てくるのか、
私にも心配ですね(汗

キャラ紹介。

嘉田^{かだ ゆきの} 幸乃 性別*女 歳*中三 武器*魔法

二次元大好きパトリリーダー。一人称は「うち」「俺」。人によつて性格が変わるときがあるが、好きな人ならテンション高い。ちよつと腹黒。

長川^{ながかわ しんじ} 親仁 性別*男 歳*中三 武器*弓

幸乃に振り回される、眼鏡で少しヘタレな男子。性格は幸乃と近い所があり、仲の良い人にはツツコミしたり気が強かったり。英語が得意。

上田^{うえだ よしかず} 義和 性別*男 歳*中二 武器*ナックル

あだ名が「よっしー」な天然入ってる幸乃の一個下の後輩。ボケなのかツツコミなのか分からないけど、ツツコミは素晴らしくきつい。

三橋^{みはし じゅんいち} 十郎 性別*男 歳*中一 武器*槍

パートの天才。楽器がめっちゃ上手い。言う事が半端なく面白いから、高確率でボケ。後、少しネタが…残り三人でつつこみする。

石川^{いしかわ まさね} 政音 性別*女 歳*高一

幸乃達のパートのパトリリーダー。幸乃がとても信賴している先輩。

宮内^{みやうち さな} 佐奈 性別*女 歳*中三

幸乃の親友であり、よっしーの友達のパートのリーダー。

安永^{やすなが なるみ} 成実 性別*男 歳*中三

親仁の親友。親仁、幸乃、成実の三人は悪友。

キャラ紹介。(後書き)

パートがパークスなのは使用です(^^)
がんばりたいと思います。

アフタクト〓始まり。 (前書き)

よく分からない展開です。

読みやすいように、一行開けてみることにしました。

アウフタクト」始まり。

「だああああああ!？」

「先輩、落ち着け。」

前後左右、どこを見ても広がる、草原。

唯一あるのは、「→animate」と書かれた看板。

最初は、現実逃避も兼ねて

「アニメイト!？まじで？」

とか言ってたけど、帰れないし、なんか危険な臭いがする。

なんか誰も人来ない。ずっと待った末にあなりました。

四人いたからまだ良かった。話し相手いるし。

ことの発端は、今日の練習中。

「先輩、行きましょう。」

うち等のパートは専用の部屋があり、そこで練習している。

四人は、その部屋に行って、

「はあ!？」

小さいブラックホール的なものを見た。

「なにこれ!？」

あ、なんか某調味料のような声が出たな、と思った。

同時に、なんかとてつもなく嫌な予感がしたので、

「部屋の外でよ、外。」

見なかったふりをして、外に出ようとした。…したんだけど、

「!?!」

出れなかった。

いきなり重力が半端無くかかったかと思うと、すぐに意識を手放させられた。

「…で、この状態、か…、」

「誰に話しかけてたんですか。」

「パソコンが携帯の前の皆さん。」

「唯でさえ変人なんですから、あんま暴走しないでください。」

「…はい。」

この子は敬語だけど…きつついなあ。ずっとだけど。

「ここに居ても埒が明かないし、看板の先に言ってみようぜ」

親仁に言われたので、animateと書かれた先に行くことにした。

「そういえば…今更だけど、animateって音楽記号にあったような…。」

「今更ですね」

後輩二人のきつい一言に半泣きしながら、うちと三人は、

唯一の手がかりとなる看板を信じ、animateなところへ行くことにした。

アウフタクト＝始まり。（後書き）

それにしても変な作品です。

地名や名前を音楽記号の名前にしたいと思います。

一小節目。(前書き)

…今回の話、本当に分けわかめです！（え
すみません！

一小節目。

「おお、賑やか。」

近づくにつれて、街の活気が見えてくる。

ここがどんな世界なのかは分からないけど、何となく異世界か何かかと思ってた。

いや、だってブラックホールが出てきた時点で。

「入る？」

「まあ…他に手がかりもありませんしね。」

「そうだな。」

「入りましょう」

三人の同意も得て、街、animateに入ることにした。

…何もナシで。

「…あーやばいよね、コレ。」

「やばいどころの話じゃありません。」

囲まれた。モンスター、とかじゃなく、住民達に。

「こいつら…見たことない服を着ている…！」

「異人か…！？」

制服見たことないんすか。まあ異人っちゃ異人だけど。

「放してもらえませんかー」

とりあえず説得。いや、言ってみただけだけど。

実は囲まれてるだけじゃなくて槍とかまで向けられてるよ。ついでに縄で縛られてる。

あ、槍は兵士だけどね。

「先輩…どうします？」

「どーするかなー」

何も思いつかない。いや、これ普通じゃね？

「こいつら…どうする？」

「異人だったら…処刑しなければ…！」

「相手はまだ子供だぞ…！」

物騒な話になってますね。

見逃してください。ある意味異人ですけど…別に取って食いませ

んから。

「どーする？親仁」

「いや、俺に言われてもなあ…。」

おお、珍しく周り敵な状況でヘタレてない…だと！？

「強行突破しても絶対捕まるし逆に危ないだろうな。」

「うん、うちもそう思う。」

だけど、何時までもここに居たんじゃ帰れるのかも分からない。

それに、ここの人たちは別に悪くない。

同じ立場だったらきつとうちもこうするだろう。自分達の生活を
守るために。

…うん、怒らない、怒らない。

なんて思ってたけど。

「ぐっ…！？」

「え、おい親仁ッ！？」

「親仁先輩！？」

「長川先輩っ！！」

親仁のうめき声に、三人の叫び声が重なった。

「多少痛めつけてないとだめだろう？」

「相手は子供です！少佐…！」

「それがどうしたっていうんだ？」

新たに現れた、「少佐」と呼ばれた人物。

こいつが、親仁を…殴った。

「お前…ふざけんな…！」

叫んだのは、よっしー。

「くっ…！やめろ…！」

次は、三橋君。二人は縄をどうにかして解こうとしている。

俺は。

「は…はは…」

ああ、そういえば感情が出やすい、出やすすぎるのがうちだな、
と思った瞬間。

笑っていた。

泣きながら笑っていた。

「やめてよ…やめろよ…この、弱いもの虐めしか能が無い野郎が…
っ、」

この所為で嫌われて。

感情が出やすすぎるから、変な目で見られて。

でも、俺は…それが友達のことと泣ける、俺の誇りだと思ってた。

…理性がぶっ飛びかけるなんて、思いもよらなかった。

「止めるのじゃ！」

そんな時に、かかった一つの声。その声の主は、

「ち、長老…」

長老だった。

一小節目。（後書き）

キャラクターの性格、歳などはほぼ実際の人物をモデルに考えています…

話とか、お互いどう思っているか、などは完璧に妄想です（笑
まあ、性格でもフィクションの部分はあります。

というか私の事を知ってる人！

モデルが誰か分かる人！

キャラ設定以外はモデルと別次元の人として考えてください！！

二小節目。（前書き）

もしかしたら、あだ名の変更とかあるかもしれません…！
変更したらここか活動報告で知らせます！

二小節目。

「その子達を放すのじゃ。」

「いくら長老と言えど…こいつらは異人——、理由が無ければ話すわけにはいきませんな。」

少佐、と言われた人は明らかに苛立っているようだ。

「そんなに子供を苛め足りないのか？理由はある。」

「ほう。それは何ですかな？」

長老はうち等に近づいて言った。

「この子達は英雄じゃよ。この国のな。」

「…この国に何故英雄が必要なのですか？」

ざわ、と戸惑いと驚きが民衆に広がる。

「言っても分からぬようだ。今は唯それしか言えんな。」

「それだけでは…放すわけには行きませんね。」

「…一人でわしと戦うつもりか？」

殺気と殺気がぶつかりあう。

何故か、老人のはずの長老のほうに威圧感がある。

「…やめておきましょう。ここの兵士達は貴方相手では役に立たないでしょうし。」

一人、といったのは兵士達の事を数に入れてなかったのか。

親にもだいぶ楽になったのだろう、驚いたように二人を見ている。

「一つ言っておきます。我々王国軍に謀反だけはしない方がいいですよ。」

少佐はそう言って、兵士達を連れ帰っていった。

「ち、長老…?」

「ああ、何も言っていなかったな…すまぬ。」

周りにいた民衆達も呆けている。

唯一、同じぐらいの歳の男子が長老に声を掛けた。

「とにかく、皆の者。この子達は異人ではない。安心なさい。」

長老と言う人物はそれだけ信頼されているのだろう。

囲んでいた人々はすぐに散り散りになった。

「トオイ、一緒に来てもらってもいいか?」

トオイ、と呼ばれたのはさっきの男子だった。

「はい。」

「あと、その四人さん。縄を切るが…逃げんでくれるか？」

「怪しい人にはついていくなって言われてるんですけど。」

よっしー大胆発言。助けてもらった人にそれを言うか。

「ほっほっほ。じゃあこれからどうするつもりじゃね。」

「…冗談ですよ。」

何故かよっしーは拗ねたような顔になった。

結局、色々教えてもらえるようなのでついていく事になった。

まちのはずれ、さきほど居た広場から十分ほど歩いた所。

そこに長老の家があった。

うち等はその中で、この世界はなんなのか、英雄とはどういうことなのかを聞いていた。

「この世界は何年か前まで音楽の世界だったのじゃ。」

「ああ、だからanimate…」

某アニグツズ屋が名前の由来では無いことに少しがっかりしながら、うちは呟いた。

「当たり前じゃないですか。」

よっしー、心の中読まないで。

「それで、四人さん、君達を呼んだのは…他でもない、倒してもらいたいのじゃ。」

「誰を？」

三橋君が聞いている。うん、確かに。

「王国軍じゃよ。」

「……「王国軍!」……」

四人じゃなく、五人の声がハモっているのは、トオイという少年も叫んだからだ。

王国軍、ってさっきのあの嫌な少佐が言ってた…?

ああ、思い出したらイライラするなあ。

「ここが音楽の世界じゃないのは王国軍の所為じゃ。今の王が音楽禁止令などを出してな。」

「何のために…?」

「それは知らぬ。しかし、その所為で以前に比べて確実に活気は下がったの。」

「そんな…で、誰か対抗しなかったんですか？」

「対抗するためには、昔のこの世界の住人が使った音楽の謎を解くことが必要なのじゃ。」

え？音楽の謎？

「それだつたら解けるんじゃないか？」

「いや、音楽の世界と言っても色々あってな…知識は、ないのじゃ。」

「だから、ある程度知識のある私達に…？」

「そついつことじゃ。」

どうやらうち等は面倒くさいことに巻き込まれたようだ。

二小節目。（後書き）

えーと、幸乃はどっから元に戻ったんだろう…

一応、あれフラグのつもりなんです…

フラグになるのか！？なんのフラグなのかも考えてないので…。

三小節目。(前書き)

やっと…装備品変えられました！

三小節目。

「引き受ける、なんて一言も言ってますよ。」

よっしーが、少し怒ったような口調でそう、言った。

「俺達は中学生ですよ？何故俺達なんです？」

「それに、僕達は武器も何も使ったことは無いですよ。」

後輩二人がもつともなことを言っている。

確かに、うち等は中学生。武器の使いかたも何も分からない。

それに、うち等は――

「金管とか木管の事は分かりませんか？」

「全て大丈夫じゃ。」

そっいつて長老が呪文を唱えだした。

「…何を？」

よっしーが聞く。あー、目がちよつと怖いよ。

「…ほい。」

呪文が終わったようだ。

パツと光ったかと思うと次の瞬間、そこには武器と装備品があった。

「この服を着ていれば、技も呪文も頭の中に入ってくる。そして、使いたいと願えば勝手に体が使ってくれる。そういう魔法を掛けた。効力がきれる頃には普通に戦えるようになるじゃろって。」

「それは解決したんだけど…なんでうち達なの？」

「それは…単に、時空の扉が開いた先に君等がいたからじゃ。」

わーお単純。そして適当。運が悪いのか良いのか。

「なら別に俺達じゃなくてもいいじゃないですか。」

おー、苛々度絶対上がってるな。カルシウム採りなよ、よっしー。

「一度開いたら暫く開けんのじゃ。と言うか、その者たちを呼び出した理由が達成されるまで。」

「…俺達の場合、世界を救うか。」

「じゃあ、どっちにしろ元の世界には返れないんだ。やらないと。」

「…仕方ありませんね。帰るためですから。」

「まあ、楽しそうだし、いいんじゃないですか？」

あんまり楽しそうじゃないんだけど。三橋君はやっぱり何でも楽

しめそうだと思えるのがうらやましいかな。うち、どうしても出来ない時あつて仲悪くなったりするから。

「さっそく着替えて武器を持ってみてくれ。幸乃、と言ったか。君は向こうで。」

「いや、別に皆が見ないんだっただらここでもいいんですけど。」

「先輩、変態呼ばわりしますよ。」

「すみません、冗談です。」

と言うわけでそれぞれの装備に着替え、武器を持った。

「え、うち魔法？槍が良かったな！。」

うちは、細いワンドに、スカートのようなロープ。

「バランス悪くなるだろ。RPGでも魔法が居ないのはきついし。」

そういった親仁は、弓に、動きやすそうな、頑丈な皮で作られた服。

「近距離ですね…しかも殴るんですか。めんどくさいですね！。」

よっしーには、ナックルと小さいダガー。そして軽量化された服。

「一番勇者っぽいですねー。よいしょっと。」

三橋君には剣と鎧。鎧、といってもあまり動きにくいわけでも、

重いわけでもなさそうだ。

それなりにこっちの世界に馴染めたのかな？学生服じゃないし。

「でも魔法かー。どんなのが使えるのかなつと。」

今使える呪文は全部頭に入っている。

勇者ってこんな感じなのかな。

「ところで、長老何故僕を呼んだんですか？」

「ああ、それは四人さんについていてほしいからじゃ。」

「「「「え——！？」「」「」」」」

三小節目。（後書き）

音楽の謎：まだ全く思いついてません。
急いで考えます！

四小節目。(前書き)

……かなりおかしいです(汗

四小節目。

「皆さんだけじゃ何も分からないし、わしはこの国、街を見守る義務がある。ついていけんからの」

「だからってなんで僕なんですか？」

「歳も近いし、なにより……トオイは音楽の知識をある程度持っている。役に立てるだろう」

へえ、やっぱり歳は近いんだ。

確かに、私達はパート練習している所を連れてこられたから。

金管と木管の知識が圧倒的に少ない打楽器だから、

色々助けにはなってくれるかもしれない。

「そついう、ことなら」

「頼んだぞ、トオイ。あと、これを」

そう言っつて、トオイに渡されたのは、ト音記号の書かれた、水晶玉。

「なに、コレ」

とりあえず、率直に思ったことを言ってみる。

「これは通信水晶玉。これさえあればわしと、皆さんの世界とも通信できるぞ」

元の世界と!?

「なら、今すぐやっていい!? 皆に知らせないと……!」

「こっちとあっちでは時間の経過は違う。時間の経過が同じになるのは、通信した相手のみじゃから、別に知らせなくてもいいと思うが、まあ練習も兼ねようか」

「そうしてくれ」

「分かった。『世界の音よ、この水晶に集まり我と汝を繋げよ』」

瞬間、水晶が太陽のように眩しく煌きあたりを照らした。

そして。

「通信したい者の名を呼べばよい」

「……誰が良い?」

「先輩が決めてください」

「えーと、成実」

「んつと、じゃあ僕は……佐奈先輩とか?」

「了解。あ、今日って政音先輩が来るって言ってたな……じゃ、呼

ぶよ」

呼ぶ方法は、何となくだけど頭に入ってる。

これも魔法使いとしての能力になるのかもしれない。

「『石川政音、宮内佐奈、安永成実、それが汝の名——汝らよ、答えよ』」

一瞬の目眩。次の瞬間、そこには三人が居た。

「ここは……ん、嘉田？それに長川、よっしー、三橋？」

「幸乃？ここどこ！？」

「なんで透けてるの、親仁達。」

こっちから見ると成実、君達の方が透けてるよ。

「とりあえず、事情を説明しなさい。話はそれからだね」

「はい」

ここは一体どこなのか、そしてうち等は何に巻き込まれたのか。

さっき説明されたことをそのまま話した。

「ま、簡単にするとRPG？」

成実のセリフに、うち等は確かに、と言うように頷く。

まあ、自分達のことじゃなかったら確かにそうだね。

「とにかく、私達はそっちへ行けないの？」

「ごめんけど、そゆこと。」

「私達はこっちで四人の通信を待つと。」

「うん。時間軸は違うから、あんまり待たないとは思っけど。」

「分かった。」

佐奈との話を終わらせ、そのまま。

「じゃあ、とりあえずは失礼します。と、バイバイ。」

そのまま、皆それぞれにとりあえずの別れを告げ、通信を終わ
った。

五小節目。(前書き)

ようやく旅立ちです。

五小節目。

「先輩？」

「え、あー、よっしー何？」

「いや、さっきから何をぼけっと突っ立っているのか、と」

別れ（？）の余韻も残さない、相変わらずの言葉。

それに苦笑いしながらも、うちは皆の方へ振り返った。

「よし、んじゃ行こうか！」

そんな訳で旅立つうち等……だったけど。

「あ、最初にどこに行けばいいか聞いてない」

「まじかよ。何してんだ」

「とりあえず、イライラするんで先輩殴っていいですか」

「なんでだよ！？殴るにしても嘉田の方だろ！？」

「いや、さすがに女子を殴るのは。それに俺Sじゃないんで、女子は殴りません」

十分Sだよ君は。

「なんで嘉田といい義といい俺の周りにはSが多いんだ？」

「なんでうちまで入ってんの」

「いや、お前完璧Sだろ」

そんな現実逃避もかねた会話を交わしている間に。

十郎君とトオイ君は普通に対策練ってました。

「トオイ、でいいかな？」

「いいですよ」

「まずはどこに行けばいいとか聞いている？」

「聞いてはいませんが……ここには王国軍の本拠地。一刻も離れた
ほうがいいでしょう」

なんかすんません。

あ、今一つ思ったことがあった。

「ねえ、この世界ってモンスター出るの？」

「はい、ですよ」

はい、バトル要素一丁。

ここから出たらモンスターがばんばん出てくるんだろうな。

「最初に行くとしたらTonalit?も、ですかね」

「どんな街なの? Tonalit?も、意味は『調性』だから、」

死んだ魚の目をしてるうちを無視して、話を進める二人。

「ワルティスラを中心とした反王国軍の街です」

「仲間になってくれるかもしれないし、いいかもね」

決定的そうですね。

「先輩、話聞いてました?」

「一応聞いてたよ。Tonalit?もって所に行くんでしょ?」

「なら、そこで良いですか?」

「うちはいいいけど。完璧に話聞いてなかったあっちではしゃいでる二人に聞いたほうがいいよ」

うちが指差した方向には、はしゃいでる二人、

親仁を殴ろうと笑顔のよっしーと、

殴られまいとよっしーのこぶしから逃げ回る親仁。

よっしー、君はナツクルが装備品なんだから自重しなさい。

「義和先輩、親仁先輩、どこ行か決まりましたから戻ってきてください」

その声に、よっしーは少し渋々と、親仁はほっとしながら帰ってきた。

そう言えば、さっきよっしー女子は殴らないって言ってたよね。

仲の良い後輩がよっしーで遊んでたな……やってみよ。

「先輩、何してるんですか」

「あうっ」

こっそり近づいたのに気付かれた。

今日のところはこの辺にしておいてやろう。

「Tonality? って言う所に向かおうと思うんですけどいいですか？」

「いいぜ」

「いいよ」

十郎君により二人の同意も得たので、うち等五人はTonality? に向かうこととなった。

五小節目。（後書き）

ワルティスラはワルツを改造した名前です。

ネーミングセンスが来いなのは何時ものことです。

六小節目。(前書き)

十郎視点です。

六小節目。

「あの、十郎さん」

「何？ トオイ」

「幸乃さんって、なんかあつたんですか」

「……どうしてそう思ったの」

「いや、幸乃さんの笑顔が時々偽者に見えて」

小声でトオイが話しかけてきた。

でも、あんまり軽々と話す訳にはいかない。

「幸乃先輩をそんなに見てたの？ 口説くの？」

「いやっ、そんな気は」

「僕に任せときなつて」

「十郎、調子乗るのよくない」

ばしんっ、と後から叩かれた。

長川先輩だった。

「何するんですかー」

「トイが困ってるだろ」

「え、いや、僕は」

「こいつ、こういつこと言うから気をつける」

「邪魔しないでくださいよ」

文句を言いながらも、少し長川先輩との会話を中心にする。

「トイ、ごめんけどこいつ絞るから、嘉田と義の方へ行つてくれるか」

「……分かりました」

しぶしぶながら、二人のほうへ向かうトイ。

「どっから聞いてました？」

「聞いてたって言うか、聞こえた。最初から」

「盗み聞きはよくありませんよ。まあ、とりあえずありがとついでいます」

「盗み聞きじゃないって……」

「ああ、幸乃先輩のことだからですか？」

「ばっ、」

先輩、慌てすぎです。

それじゃあ……

僕に遊ばれますよ

「あれ、先輩、やっぱり幸乃先輩に関係あるんですか？」

「別に、そんなことはっ」

「そういえばこの世界に来てから一度もヘタレてませんしね」

「俺は別に、ヘタレてなんか——！」

「そんな大きい声でしたら、皆に聞こえちゃいますよ」

うん、面白い。

もうそろそろ止めてあげるかな。

「どうしたー親仁、十郎君？」

「ああ、聞こえちゃったみたいですね」

隣で疲れた顔をしている先輩に声をかける。

「覚えとけよッ——」

「嫌です」

笑顔でそう切り返し、義和先輩の元へ。

「はあ」

先輩も溜め息をつくど、僕の後を続いた。

「親仁、アンタのヘタレ具合は誰でも知ってるから今更いわないでいいよ」

「チビに言われたくねえがな」

「誰がチビじゃ。やるか？」

「チビが俺に勝てるのか？」

二人は臨戦態勢に入った。

別段驚くことでもない。いつもの事だ。

だけど、知らない人が一人。

「え？ ああ、これ良いんですか」

「ああ、ほっとけ。いつもの事だ。俺等にとっては」

「そういうこと。なれたほうがいいよ」

「そう、なんですか」

喧嘩するほど仲がいいって言うしね。

長川先輩は完璧分かってるんだけど、

幸乃先輩はまったく何も無いっていうか、鈍感だし。

僕はそういう話が好きだから、少しでもあの夫婦喧嘩っぷりを見ておきたい。

「なんて、これ言ったら二人から説教食らわされるだろうなあ」

「ん、なんか行ったか、十郎」

「いーえ、何も」

異世界に飛ばされたっていつもどおりに。

これが、僕達の楽しい、良い所だと思ってる。

六小節目。(後書き)

街に着かない。

音楽の謎が思い浮かばない。

どうしましょう(笑)

七小節目。（前書き）

やっぱり街には着きません。
とりあえずめっちゃ小さいバトル回です。

七小節目。

「ぎゃああああでたああああッ!!」

「落ち着いてください、このくらいならすぐ倒せます」

トオイ君の発言により少し落ち着きました。

なぜこんなにも慌ててるかというと、モンスターが出たからです。モンスター自体はRPGの最初に出てきそうなやつなんですけど、やっぱり初見となるとかなり驚くもので。

「うわああああ、こっちくん!!」

「なにこれ怖い」

「トオイ、これ普通に倒せる？」

……主に年長者組でした。パニックてるの。

モンスターの数は、二匹。早く片をつけようと、うちは詠唱を始めた。

「あーもう死んでよ、『我等に仇なす者を焼け、ファイアー……っ、」

「馬鹿、いきなり詠唱するな！」

親仁の弓とうちに向かってきた敵モンスター一体の剣が交わる。

敵モンスター、いわゆるゴブリンの動きは以外に素早かった。

「はあっ！」

親仁はゴブリンの剣を跳ね返す。

「嘉田、お前気をつけろよ」

「……ん、ごめん。ありがとう」

さっきのは明らかに短慮だったと、反省し、そう口に出した。

四人に短距離戦闘を任せ、とりあえず後ろに下がる。

そして、もう一度。今度こそ。

「『我に仇なす者を焼け、ファイアーボール！』」

勢いよく燃え盛った炎の球は、ゴブリンに当たる。

炎に焼かれたゴブリンは消滅した。

「あっつ、」

「先輩、熱いですよ」

剣と拳で戦う若干二名からは苦情が出たが、とりあえず無視した。

「少し不思議なことがあるんですが」

「どうしたの？」

トオイ君が少し深刻な顔をして話しかけてきた。

「さっきのゴブリン、あまりすばやい種族ではなく、あまり頭も良くないんです」

「え？」

「だけどさっきの……嘉田の詠唱を一番に止めに来たぞ？」

「そう、おかしいんです。今までなら一番近い敵に何も考えず攻撃する、そんな敵だったのに」

「誰かが邪魔しようとしてゴブリンを操ってるんじゃないですか？」

「あー、それが一番妥当かもね」

よっしーの意見に賛同し、その「誰」を考える。

他の四人も考えていたようだが、たどり着いた答えは皆同じだろう。

「ねえ皆、答え一緒に言ってみない？」

「いいですよ」

「じゃあ、せーの、」

「「「「「王国軍」「」「」」」」」

答えを告げる声は見事にハモった。

「やっぱりあの最初に出てきたおっさんが告げ口したんでしょうね」

「あいつに一発殴り返したいな……」

最初のおっさんを思い出し、苦虫を噛み潰したような表情をする。

あいつらがうち等を敵だともう判断した。

まあ、喧嘩売ったようなもんだしね。

「とりあえずワルティスラ、だっけ？ に協力求めるしかないか」

そう呟いて、これから襲って来るだろう敵達を想像し、溜息を吐いた。

八小節目。（前書き）

やっと街にいったようです。

八小節目。

「ああ、ここがTonalit?tです」

「やあっとついたー」

あの後もゴブリン以外にもモンスターを倒しながら、うち等は進み――

とうとう最初の街、Tonalit?tに到着した。

「ここは反王国軍の街。協力を得られればいいのですが」

そう、ここは反王国軍。だから少しは安心できるはずだ。

「animate出身、トオイです。僕とこの四人の入街許可をお願いします」

「わかった、少し待て」

入り口の受付(?)の人がカタカタとパソコンを動かしている。

それにしても、この人……某アニメキャラみたいでカッコいいかも！

「いたっ」

「嘉田お前ボケツと立ってんじゃねえよ」

「いきなり叩くなし。お前、やるか？」

「上等だ。やるか」

いきなり頭を親仁に叩かれたので、殴り返そうと拳を構える。

「先輩、恥ずかしいんで止めてください」

次の瞬間、よっしーに睨まりました。

「すみませんでした」

「その女は戦うのか？」

「え？うちの事ですか？」

「ああ、そうだ」

入街許可ができたのか、受付さんが声をかけてきた。

「戦いますよー魔法ですけどね」

「そうか、あまり戦う女は居ないからな。声を掛けた。すまなかった」

「あー別に大丈夫です。うち、男っぽいんで」

「ん。じゃあ五人さん、楽しんでいけよ！」

「「「「はい！」「」「」」」

気さくな受付さんの声に、うち達は大きく頷いた。

「とは言っただものの、ある意味仕事できたんだよなあ」

「あー、そうだね」

親仁の苦笑いに、苦笑いで答える。

「ワルティスラって人はどこに居るんすかね」

「ここには王政は在りませんから——会つのは簡単だと思いますが」

「そういうもんなの？」

「そういうものです」

「でもただ歩いただけでは分からないでしょうから……聞き込みをしましょう」

「どうせするんだったら分かれたほうがいいよね」

トオイ君の案に頷く。

「じゃあ先輩！一人ずつに分かれたら危ないですから二組に分かれましょう！」

「うえ？ いいけど……メンバーは？」

「ちょっと待ってください」

なんか生き生きとした笑顔で十郎君が言ってくるので、従うことにした。

十郎君が後ろを向いて、しばらくごそごそして……

「はい、これ！」

右手にペンを持ったまま、左手に持っている割り箸を突きつけてきた。

そのペンと割り箸、どこにあった。

「これ引いてください。赤い印が二つついてますから、赤い印とそうじゃない人で分かれましょう」

「おお、十郎よく思いついた」

「……（先輩二人とも十郎の笑みの意味分かってないのか）」

「なんで、早速引いてください！」

「わ、分かった」

十郎君の笑みに少し怪しさを覚えながらも、ぐいぐいと押し付けてくるので、しょうがなく一本割り箸を取る。

「あ、赤だ」

うちが引いたのは赤。ということは二人組か。

「はい次長川先輩です」

印を確認した後、十郎君のほうを見ると、すでに次の人のもとへと移動していた。

「え、俺なのか？ ……これかな？」

あ、今十郎君怪しく笑った。

「げ、赤……」

「え、親仁赤なの！？」

「じゃーそれで決定ですね！ 義和先輩、トオイ、行きましょう！」

「あ、ちよつとまって十郎君ー！！」

十郎君に引つ張られ、三人は瞬間移動でもしたかのような速さで向こうのほうに居る。

「ま、まじかよ……」

「それはこっちのセリフだ親仁ーっ！！」

うちの叫びは街全体にこだまして、うちと親仁は街の人の好奇心な視線にさらされてしまった。

八小節目。（後書き）

次は幸乃&親仁のターンにしようか、義和・十郎・トオイ組にしようか。

迷い中なうです。

九小節目。（前書き）

義和&十郎&トオイ組です。義和視点！

それにしても義和君ひどい（笑）

九小節目。

「十郎……さっきの割り箸見せてよ」

「ああ、気付きました？」

「当たり前だろ。多分先輩達も今頃分かってるだろうし」

まあ、それが分かってるから逃げてきたんだろっけど。

「お前、最初っからそのつもりだったんだろ」

「ええ。面白そうですから。いい加減幸乃先輩もフラグクラッシュ
ー引退してほしいんですけど」

十郎はそう言って、残った三本の割り箸を振る。

割り箸には、どれも赤い印が付いていた。

「あ、あれ？ 赤い印は二つなのでは！？」

「え、トオイ気付いてなかったの？」

ああ、トオイってにぶいんだな。

「全部赤い印が付いてるから最初と次に引いた人が必ずペアになる
しくみになってる」

せつかなので仕組みを教えてやる。

「え！？それって、十郎さん、」

「えへへ〜そういうことだよ。僕あの二人と一緒にしたかったから」

「さっきも言ったけど絶対怒られると思う。先輩に」

「だって……そろそろ進展してほしいかったりするしさあ」

そう言った十郎は目をきらきらと光らせている。

「……俺知らないよ」

呆れながら呟く。

まあ巻き込まれても嫌だから見つかったら離れておこう。

「先輩が鈍いのは前からだし、二人ともえっと……ツン、デレだっけ？なんだろ」

「あーそういうことですけど。まあ進展することもあるんですよ」

ツンデレなんて言葉は全部十郎から教わった。

あんまり覚える気も無いのだが、先輩二人に関係あるということでなんとなくそれだけ覚えていた。

あとは、クとかヤとかついてたような。覚えてない。

「あの……お話中っぱいですけど、少し良いですか？」

「ん？なに、トオイ」

「今その人が話してたんですけど」

トオイの視線の先を見る。いかにも仕事中といった雰囲気のおっさんが見える。

「さっき僕たちがいた方向で喧嘩してるそうなんです。人を巻き込みそうな勢いで」

「……ああ、」

「だからお二人は大丈夫かな、と。……義和さん、十郎さん？」

「大丈夫だよ。それ多分」

「先輩達自身だからな」

「は？」

「行ってみれば多分分かると思うけど。先輩、どうします？」

「俺あの状態の二人に関わるの、ぜってえ嫌だ」

「と、いうわけで先輩達は大丈夫だから他行こう、他」

「え？ ええ？」

トオイは戸惑っている。

まあ、見て慣れてもらった方が後々めんどくさくないかしんないけど。

でも大人気ないからな、あの先輩達。

通行人に知り合いだと思われたくない。少なくとも、今は。

「しっかしひどいですね義和先輩w」

「別に普段の先輩達が嫌いなわけじゃねえし。巻き込まれるのと俺達まで変人扱いされるのは嫌だ」

「まあそれについて反論はしませんけどw」

いや、お前なら普通に楽しんでそうな気がする。

「トオイ、行くぞ」

啞然として突っ立っているトオイに声をかける。

「へ？あ、ああ、はい！」

「トオイばーっとしてたら危ないよ？」

「すみません」

まあ啞然とする理由も分かるけどな。

だからこそ面白いのかもしれないけど。

「……まあ、そういう所が先輩達らしいんだけどな」

「先輩、何か言いました？」

「何でもない！」

その時、俺は気付かなかったが、十郎によれば俺は笑っていた……らしい。

九小節目。（後書き）

全力で引かれている先輩二人。
いつものことです。

十小節目。（前書き）

幸乃&親仁のターンです。

二人は突っ込み&他人（知り合い）不在で馬鹿になります。

十小節目。

「てめえ……一回本気で戦^{やぶ}るか？」

「よっしー達もないし丁度いいかもね」

よっしーが居たら今頃うちもあいつも叩かれて叱られていた事だろう。

（子供の喧嘩は止めてください。俺まで変人にはなりたくないですから）

とか言つて。

「『我に仇なす者を焼け、ファイアーボール』！」

「一つで当たるわけねえだろ！」

さすがにモンスター相手ではないので本気ではないが、

まあ簡単によけられてしまった。

「『ダブルアロー
二重奏』」

ヒュ、と何かが風を切つて飛んできた。

それが上手い具合に服に引っかかり、壁を後ろにしていたうちは、壁にとめられてしまった。

まあ矢なのですぐ抜くことはできるが――

「うりゃあああっ！」

「あまいよッ！！」

殴りかかってきた親仁に、うちは蹴りをかます。

親仁もうちも、手にはなにも持っていない。

「やるな……」

「親仁もね」

あまり運動は得意でなく、体力も人並みより少し下ぐらいしかない。うちは、肩で息をする。

親仁はもう少しましな様だが、まあ男子だしな。

そのまま、全力で喧嘩する。

周りには人だかりができて始めている。

「……あのさあ、」

「うん、うちも思った」

「ここ、人集まってきたくない？」

「……やめよっか」

さすがに人が多くなってきたので止めることにした。

そのくらいのことは弁えているつもりなんで。

まあ、なら最初っからやるなよ、って話だけど。

「情報、集めに行こうか」

「そうだな」

喧嘩を止めたことにより、少し人が少なくなっている。

その中をくぐって外へ出ようとする。

「!？」

「嘉田？」

ぐい、と肩を引かれ、立ち止まる。

「誰？」

「こんにちは、少女fillie」

そこに立っていたのは、顔をグラスンやマスクで隠している明らかに怪しい人で。

「へ、変人……っ」

「変人とはひどいな。僕は……ぶっ！？」

「嘉田になにしてやがる変人野郎」

次の瞬間、弓の木の部分で親仁に思いっきり叩かれた。

「痛たたた……話を聞いてよ。こっちの子だけじゃない、君にも話があるんだから」

「俺にも？」

「そう。僕はワルティスラ。この街を守る人として、街中で魔法とか矢とか放ってる人には話を聞かせてもらわないとね。僕から見たら君達のほうが変人だよ」

「——ワルティスラあ！？」

「ん。そうだよ。知ってるの？ まあとにかくこっち来てよあまり街の人に見つかりたくないんだって」

叫んだ所為でじろじろとこっちを人だかりは見ている。

確かに、見つかりたくないのならここを離れるべきだ。

「ついてきてくれるよね、二人とも」

その声に、うちと親仁は二人してコクコクと頷いた。

十小節目。（後書き）

ワルティスラ登場です。

あれ、最初はワルティスラ某地平線の方みたい
に胡散臭いおっさんにするつもりだったのに
なんかさわやかなお兄さんになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7746w/>

Fantasy in the Percssion!?

2011年12月3日22時48分発行